

「論文と作文とはどこが違うか」という題で書けという注文を受け、
「テーマ」と「問い」なるほどこれはよい「論文の問い」になっていると感心しました。

いま私が「論文の問い」といって、従来のように「論文のテーマ」とか「論文の題目」といっていいことに注意してください。

わが国でふつうテーマとか題目とかいわれているのは、大ざっぱな場、そこから問いをひき出してくる問題の場 problem area のことで、論文のテーマではないのです。「論文について」という問題は問題を提示しますが、論文の問いにはなりません。「ドイツ人について」というのは作文のテーマには結構だが、論文の題ではありません。問いになっていないからです。「ドイツ人が明治の日本に与えた影響の利害を論ぜよ」としたら、論文の問いらしい問いです。「・・・はなぜか」「・・・を論ぜよ」というようなのが論文の問いです。

論文と作文とは、題からして違う（はずな）のですが、それは、両者に課された目的が違ふ

者に課された目的がそれぞれ違うからです。論文は論議し、主張し、分析し、判断することを主眼にしているのに対し、作文は情景、印象、体験などの描写を中心にしていくからです。論議は問いと答で成立しますから、その題は根本的に（形は問いでなくとも）問いになるわけです。

「ドイツ人について」というテーマで作文するならば、自分がベン・フレンドとしてつきあっているドイツの青年を描いてもよいし、初めて訪ねた神戸のドイツ料理屋での食事の体験を描いてもよいし、夏休みにジャルパックで三日間を過ごしたライン地方の風物を描いてもよい。作文は、一定の問いに対して答える、主張する、論議する論文とは違って、あくまで描写文、感想文だからです。

もちろん論文にも、後述するように、描写的要素が入ってきますが、それが中心ではなく、また描写の種類が多少違います。

「論文について」といわれて、日本で、またアメリカやドイツで学位論文を書いたころの思い出を書くのは作文ですが論文ではありません。「夏休み」といわれ、村の盆踊りの風情を描くのは作文ですが、「夏休みの長さ——長すぎるか否か」という問いに対して「短過ぎる」と答え、延長を主張し、その理由を説明するのが論文です。

論文にも描写はある

専攻分野はなんであれ、論文は主に、一定の問いに対して答え、論議するものです。理由を分析説明し、ものごとを比較し、評価する、要するに考え、判断するという知的活動の表現です。「大日本帝国憲法はなぜ重要だったか」「大日本帝国憲法と現在の日本国憲法とを比較せよ」というような問いに答えるのが論文です。しかし、「大日本帝国憲法はどのようにして成立したか」とか「東海道線の発展過程を述べよ」というように、過程の描写を要求するのも論文の問いになります。つまり論文には分析的なものだけでなく描写的のものもあるわけです。そしてこのふたつが、大きくいつて論文の二種類です。

ただし実際の試験問題には、分析と描写の両方を要求しているものも少なくありません。特に歴史的な問題を扱う場合、過程描写が因果の分析と密接につながることが多いのです。なぜなら、さまざまな個性を持った人間が作り出す歴史のできごとは、個性のない自然界のできごととは違い、「Aならば必ずBになる。Bになったから必ずAが原因していた」というように普遍法則によって説明できないからです。特定の状況、過程から生まれた特定の因果関係があるからです。

しかし論文で描写文が用いられるとはいっても、それは作文の描写とは違います。作文での描写はあくまで主観的、感情的であるのに対して、論文での描写は客観的、知的なものです。「東海道線の発展過程を述べよ」といわれたら、新幹線に初乗りの気分を描写するのではなく、いつ東海道線が敷かれ、それがどういう段階を経てなぜ発展してきたかを客観的に描写し、分析も加えます。

のはずれ出題の罪

論文試験が増えるにつけ困るのは、論文試験と称しながら、論文の設問ではない作文の設問が増えていることです。つまり「ドイツについて」とか「新憲法について」とかいうたぐいのものが論文の設問として通用し続けていることです。だいたい日本人は感情的、情緒的な作文や随筆を書くのが得意な民族的ですが、理論的、論争的な説得のまじり民族です。作文的民族、非論議的民族ともいえましょう。ですから、昔から大学の先生でも、学生に対しても作文的発想で論文の指導をする人が多かったです。そういう指導を受けた昔の学生が今大学の教官になり、再び作文的論文指導を行ない作文的な論文テーマを出しています。論文的な設問のしかたを知らない先生は高校にも大学にも少なくないのです。

作文的な論文テーマが出てきて、とまどうのは、（そういうテーマに異和感を感じない日本の）受験生よりも、そのようなテーマで書かれた「論文」を採点する採点委員の先生自身なのです。作文的な論文テーマが「ドイツ人について」だったとします。受験生のなかでAは自分のベン・フレンドの肉屋の息子マックス・ヴェーバーについて、Bは神戸のレストランのカール・マルクスについて、Cはラインの船遊びについて書くでしょう。さらにDはドイツ音楽の日本での受容過程について多少むずかしい論議を展開し、Eはモガディシユのハイジャック事件に関連して、法の支配についての日独の考えの相違のルーツを探ります。

作文的な論文と論議的な論文がいろいろ乱れ、ベン・フレンドから法の支配にまでわたる多様なテーマを扱った五人の「論文」を公平に比較評価するのはきわめて困難です。あまりに漠然とした「テーマ」を与えることは、結局受験生の数と同じだけ多種多様なテーマを与えるに等しい。五人ならまだしも、百人の受験生がいたら、このような「論文」の公平な評価は不可能です。

客観テストの出題ミスに対しては高校の先生や受験生の監視の眼が絶えず光っており、きびしい批判がなされています。同じようにきびしい批判が論文試験の出題に対しても寄せられることを期待します。

答案を書くためのポイント6

論文試験の答案を書く場合には、少なくとも次の六つのことに注意しましょう。

①「問いは何か」をはっきり見きわめ、それに正面からぶつかる。問いをよく読んで何が問われているのか、分析的な答、描写的な答のどれが要求されているのか、あるいはその両方が必要なのか。なんの理由を説明すべきか、なんの経過を描くべきなのか。それを見抜き、それ以外の余計な脇道に踏み込まない。

②論理的に首尾一貫した、骨組みを考える。分析的であれ描写的であれ、一点から次点へのつながりと全体の建築学的構成とをはっきりさせることが何より大切。大筋、骨組みを考える段階ではまだ書き出さない。大筋ができあがってから、肉づけをし、書き出す。

③単語、表現、言いまわしを明確にする。論文に最も大切なのは明確さで、それは第一に骨組み、筋書の明確さに依存するが、第二には、表現の明確さに依存する。わかりにくい、あるいはあいまいで多義的な表現を避ける。

④単細胞的思考ではなく、きめの細かい複雑（難解ではない）思考を働かせる。一面的、独断的にならず、いくつかの可能性があれば、それらすべてを考慮する態度、「一方ではこうだが、他方ではこうだ」という、きめの細かさがほしい。

⑤内容を正確に、豊かに、独創的にする。骨組みと表現形式が明確であるだけでなく、その中身が、事実や思想に関して正確かつ豊かであることを期待したい。高校生に独創性を期待することは無理かもしれないが、少なくとも紋切型の借りものではなく、自分で考え、消化した仕事であるという証拠を示してもらいたい。

⑥出された題が作文的テーマだったら（たとえば「ドイツ人について」ときたら前出のE君の例にならぬ）自分でそれを論議的な問いに直して答える。論文テストは作文と違い、情緒的感性ではなく、論理的知的思考力を競いあう場だから、それにふさわしい答案が必要となる。

最後に、イギリスの大学入学資格試験の問題から二例をあげておきます。

「なぜイギリスは一九一八年にドイツと戦うことになったか」

「イギリスは一九五〇年代の国際政治に指導的役割を果たしたか」